

量詞と形容詞の共起関係について — 描写対象の認知体系に着目して

井出 克子

(大阪市立大学・院)

提要 关于量词和形容词的搭配问题，有的学者已经做过了详细的研究，如邢福义 1965、刘焱 1999 等。但这些研究只涉及到句子里的量词和形容词，并未着眼于形容词所描写的对象。我们说“一片漆黑”时，联想到的描写对象就是夜色，而不是涂满墨汁的纸。那么，这里有什么样的规则呢？

本文试图以视觉描写为中心，探究描写对象的认知过程，指出“量词＋形容词”结构的一个成立条件，即描写对象不具有明确的轮廓(=“界”)，而且无论从平面还是空间角度来讲，都具有无限性。此外，还对五感描写中除视觉以外的听觉、味觉等进行了简单的考察，比较了各种感觉的量词和形容词的搭配情况，从中看出了通感现象的影响。

关键词 量词 形容词 认知 界 通感

0. はじめに

人や動物、乗り物、机などは、いずれも個体数としての数量を持つ。また、個体として一定の量は持たなくても、水のような液体も、コップで一杯、二杯、……と、その数量を量ることができ、さらには、「ひと蹴りする」、「二往復する」など、具体的な物質ではない動作も回数として数えることが可能である。このように、量詞が名詞や動詞と共起することは言語現象としてごく普遍的に見られるのだが、中国語では、量詞と名詞或いは動詞との共起だけでなく、さらに“一片漆黑”、“一脸红”の“漆黑”、“红”といった形容詞との共起も確認することができる。しかし、このように言語現象として「数詞＋量詞＋形容詞」構造が成立しているにもかかわらず、文法書等でこの構造が一項目として取りあげられてはいない。これは、名詞や動詞と異なり、形容詞が明確な数量を持つ具体的な概念として見なされにくいことが大きな要因の一つであると考えられる。

そこで本稿では、認知の視点から、量詞と形容詞の間に見られる選択関

係を分析・検討し、中国語では形容詞をどのように捉えその量を見いだしているのか、また、その認知過程にはどのような特徴が見られるのかについて考察する。

量詞と形容詞の共起は描写性の強い表現に多く用いられるため、口語表現においては、かなり固定した表現以外は使用頻度が下がる傾向が見られる。そのため、ネイティブチェック¹⁾による許容度の判断にも個人差が見られ、そこに明確な線引きを行うことは困難である。そこで今回は、ネイティブチェックで揺れのある用例も含め、主に小説データで確認できるものを取り上げて検討を進めていくこととする。

また、用例中の量詞には囲みをつけ、共起する形容詞はアンダーラインを付し、必要の際には、描写対象を波線で示す。

1. 先行研究

量詞と形容詞の共起関係については、早期の研究として邢福义 1965 が挙げられる。その内容を簡潔にまとめると、“一团长”、“八公斤重”の“丈”、“公斤”といった、度量衡に関する量詞が形容詞を修飾できるという立場から、その文法構造上の特徴を述べているに過ぎない。

これに対し、刘焱 1999^{補注)}は、度量衡に関するもの以外でも形容詞を修飾できるとし、形容詞との共起が確認できる量詞を、度量量詞、比況量詞 (“一巴掌大”)、摹状量詞 (“一片漆黑”)、空間量詞 (“一脸红”)、時間量詞 (“一阵漆黑”)、其他量詞 (“一些自卑”) の6つの小グループに分類している。

[表 1]

度量量詞：丈、尺、寸、斤、米……
比況量詞：人、脚、指、搂、抱、步、巴掌、竹竿 ……
摹状量詞：片、团、丝、线、缕、股、抹、点 ₂ 、星 ……
空間量詞：脸、身、腔、肚子……
時間量詞：阵……
其他量詞：点 ₁ 、些、分、份……

(刘 1999)

[表 2]²⁾

度量量詞	——	量度形容詞
比況量詞	——	量度形容詞
摹状量詞	片类	—— <u>颜色形容詞</u>
		—— 氛围形容詞
	丝类	—— 性情形容詞
		—— <u>颜色形容詞</u>
空間量詞	—— 表情形容詞	
	—— <u>脸色形容詞</u>	
時間量詞	—— 心里状态形容詞	
	—— <u>脸色形容詞</u>	

(刘 1999)

[表1] はそれぞれの小グループに属する代表的な量詞、[表2] は分析の結果導き出された各小グループの量詞と共起する形容詞の属性である。形容詞の具体例については紙面の都合上省略するが、刘 1999 はその意味特性に着目して形容詞のグループ化を行っており、量詞と形容詞の共起関係について詳細な検討が行われているといえよう。しかし筆者は、さらに以下の点について再検討を行う必要があるのではないかと考える。

まず、6つの小グループに見られる共起関係の特徴を比較してみると、これらは大きく2類に分かれる。すなわち“度量量詞”、“比況量詞”と“摹状量詞”、“空間量詞”、“時間量詞”、“其他量詞”の2類である。この一つの理由として、まず共起可能な数詞の性質が関与していよう。先にいくつか挙げた例はいずれも数詞“一”と共起したものであったが、以下の例からもわかるように、“度量量詞”、“比況量詞”は“一”以外の具体的な数詞と共起可能である。これに対し、他の小グループではその数詞を“一”以外には置き換えることはできない³⁾。

A: 三米高 (度量量詞)、五巴掌大 (比況量詞)

B: * 两片漆黑 (摹状量詞)、* 四脸枯黄 (空間量詞)、* 一阵漆黑 (時間量詞)

さらに、“度量量詞”、“比況量詞”は、程度を表す形容詞“高、遠、長、厚、寬、深、重”などとは共起可能であるのに対し、その反義語対である“矮、近、短、薄、窄、淺、輕”とは共起しない。

* 三米矮、* 五巴掌小

以上の2点から、筆者は“度量量詞”、“比況量詞”と共起する形容詞はすでに、「高さ」、「距離」といった一定の数量を持つ概念として捉えられており、邢 1965 も示したように構造上は形容詞であっても、認識としては名詞的成分として捉えられていると理解すべきだと考える。これについては、筆者が行ったネイティブチェックにおいても同様の回答が多く得られている。そのため本稿では、“度量量詞”、“比況量詞”に属する量詞については検討対象外とした。

次に、“空間量詞”について、刘 1999 のいう“空間量詞”をみると、確かに“腔”、“肚子”は容器としての一定の空間的広がりを持っているのだが、“脸”、“身”は容器としてではなくあくまでもそのものの表面が描写

対象であり、これらを“空間量詞”というグループにまとめてしまうのはいささか無理があるように思われる。

最後に、[表2]にアンダーラインで示したように、量詞と共起可能な色彩形容詞は複数の小グループにまたがって分布している。刘1999では、その色彩形容詞間に見られる傾向、例えば形容詞の描写対象の特徴による共起関係の差異などについては特に触れていないが、量詞の選択は、描写対象の特徴によっても大きく左右されるものであり、量詞と形容詞だけに着目するのではなく、やはりその描写対象を含めた検討が必要なのではないかと考える。

以上のことから、本稿では主に刘1999のいう“摹状量詞”、“空間量詞”を取り上げ、形容詞の描写対象の分析を通して、認知の視点からそこにみられる規則性を確認する⁴⁾。また、「数詞+量詞+形容詞」の共起関係は、“一丝不安”のように抽象物を描写対象とする場合にも多く確認できるのだが、今回は、描写対象が比較的イメージしやすい視覚的描写を検討対象の中心とし、最後に視覚以外の感覚描写、すなわち、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の描写について補足的に取り上げる。ただし、刘1999のいう“時間量詞”も視覚を描写対象としているが、この場合、描写対象は視覚そのものではなく時間量であるため、これについても本稿では検討対象外とする。

2. 視覚描写

視覚描写は大きく「色彩」と「明暗」に分けることができるが、「数詞+量詞+形容詞」構造が確認できるもののほとんどは色彩描写である。そこで、ここでは色彩描写についてその描写対象を「平面的広がり」、「空間的広がり」、「個体の表面全体を覆う色」、「線的広がり」に分けて検討を進めていく。

2.1. 平面的広がり

平面的広がりとは、共起する量詞が持つ特徴からさらに「視界全体」への広がりとは、ある平面上の「部分」を占める広がりという2類に分類することができる。

2.1.1. 視界全体

まず、用例を見ていただきたい。

- (1) 走到窗前，外面一片雪白，昨夜竟然悄无声息的下了一场雪，……。
 (窓の前まで行くと、外は一面真っ白で、昨晚なんと音もなく雪が降ったようで、……。)
- (2) 平静无波的大海表面，一眼望去，除了一片深蓝，根本看不到任何的事物。
 (静まりかえった大海原の表面は、一望すると、一面の深い青色以外、まったくもって何も目にすることができなかった。)
- (3) 雨后的草原更加是一片葱绿，空气清新。
 (雨が降ったあとの草原は、さらに一面の緑が加わり、空気は新鮮だった。)

この例から、「视界全体」の広がりとは具体的に、窓前に広がる景色、大海原、草原といった、その輪郭をつかめないほどの果てしない平面的広がりを目指すことが明らかである。この場合、量詞は“片”のみが選択されるのだが、これについては“片”が名詞と共起する場合に、“一片大海”、“一片草原”のように果てしなく広い平面を描写対象とすることからも理解しやすい⁵⁾。

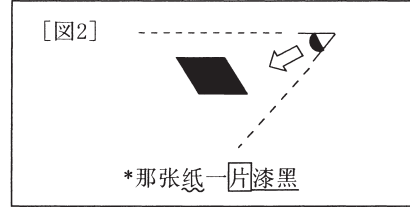
これに対し、同様に量詞“片”と共起して平面全体への広がりを書写している、用例(4)、(5)の画面や写真のように、その描写対象の輪郭がはっきりと認識できる場合も確認することができる。

- (4) 那窃录机只有小米颗粒大小，接收机略大一些，也只有一个手掌大。
 ……突然，接收器上的屏幕一片漆黑，接着耳机里传来竺斐的一阵可怕的吼叫声。
 (あの盗撮機はたった米粒ぐらいの大きさしかなく、受信機はやや大きめだが、それでも手のひらサイズしかなかった。……突然、受信機の画面が一面真っ黒になり、続けてイヤホンから竺斐の恐ろしい叫び声が聞こえてきた。)
- (5) 这种情况多发生在二手数码相机，……有时由于 CCD 损坏但在拍摄时一切正常，直到电脑下载照片时才发现照片一片漆黑，……。
 (このような状況は中古のデジタルカメラによく起こることで、……ある時は、CCD が故障していても撮影時にはすべて正常だったため、パソコンに写真をダウンロードした時に初めて写真が一

面真っ黒であることに気が付き、……。)

このようなケースで確認できる描写対象は、ほぼ画面や写真に限られる。では、画面や写真と、先に見た大海原や草原にはどのような共通点があるのだろうか。

そこで、[図1] を見てみよう。



画面や写真は、カメラのレンズを通して切り取られた平面である。しかし、発話者の目に映っているのはその枠中に写し出された情景であり、画面や写真の枠は発話者の意識内には含まれていない。すなわち、このとき我々は「カメラのレンズ」＝「人間の目」を通して対象物を認識しているのであり、本来限られた平面上に存在しているその情景は、発話者のイメージの中で眼前に広がる平面的広がりを展開しているのである。そのため、画面や写真は結果として用例(1)～(3)と同様の認識過程を経ていると考えられ、「数詞＋量詞＋形容詞」構造が許容されるのである。逆に、このようなイメージが喚起されない描写対象、たとえば[図2]のように、単に一面真っ黒な紙を描写する場合には“*那张纸一片漆黑”と表現することはできない。この点からも、量詞と形容詞の共起には、その描写対象が「際限なく広がる視界全体への広がり」という成立条件が必要であることを裏付けることができるだろう。

さらに、用例(4)、(5)でそれぞれ“突然”、“才”が用いられていることからわかるように、描写対象となる画面や写真は最初からある色を呈しているのではなく、その色が突然出現する、あるいは突如認識されるケースがほとんどである。逆に、例えば写真が最初から一面真っ黒であった場合、それは先に挙げた一面真っ黒な紙と変わらない。そのため、「数詞＋量詞＋形容詞」構造の許容度がやや下がる傾向があり、ここでもやはり、

画面や写真がレンズという目によって実際の情景から切り取られた平面である、という性質を指摘することができる。

ただし、同様に視界全体への平面的広がりを描写対象としていても、用例(6)“一片花花绿绿的世界”の描写対象を省略してしまうと、落ち着きの悪い表現となる。これは、“在”に導かれることでその描写対象が明確に「場所」として認識されるためであり、この場合はやはり、“世界”のような描写対象を明示する必要があると考えられる。

(6) 圣诞节的购物人潮比往常的假日更多，一下子那白色的身影就淹没在一片花花绿绿的世界里。

(クリスマスの買い物にきた人波は、いつもの休日より更に多く、すぐさま白い姿は一面の色とりどりの世界に埋もれてしまった。)

(6)' ?? 淹没在一片花花绿绿里

2.1.2. 部分

次に、平面上の「部分」を占める広がりについてであるが、ここで確認できる量詞の主なものとしては“抹”、“片”、“丝”が挙げられる。

(7) 天色已经蒙蒙亮了，远方的天空出现一团鱼肚白，……。

(空の色はすでにほんやりと明るくなって、遠くの空にはひとすじの青白い色が現れ、……。)

(8) 萧青峰苍白的脸上泛起一片微红，心道：

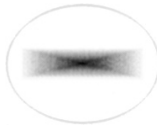
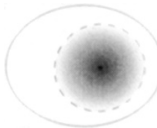
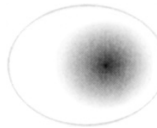
(蕭青峰は青白い顔に一片の薄紅色を浮かべ、心の中で言った。)

(9) 鲁先生正在书案上写着什么，见如雪进来，便含笑点了点头，如雪脸上莫名地涌上一丝微红，忙低头行了行礼，至对面书案前缓缓坐下。

(魯さんはちょうど書齋机で何かを書いており、如雪が入ってくるのを見ると、微笑みながら少しうなずいた。如雪の顔には、なぜだかわからないがひとすじの薄紅色が浮かび、慌てて頭をさげちょっと挨拶をして、向かいの書齋机の前にゆっくりと座った。)

用例(7)の明け方の空の色には“抹”が、用例(8)、(9)の頬がほんのり赤くなる様子にはそれぞれ“片”、“丝”が用いられているのだが、各量詞のイメージを図示すると[表3]の各図のようになる。

[表 3]

	[図 3] “抹”	[図 4] “片”	[図 5] “丝”
			
描写の 焦点	带状の広がり	一定範囲の広がり	かすかさ
	範囲		程度

“抹”は、名詞と共に起する場合と同様に長くたなびくイメージが伴うため、描写の焦点が「带状の広がり」とまとめられるのは理解しやすい。これに対し“片”、“丝”は、用例(8)、(9)で同じ描写対象について用いられていることから推測できるように、[図4]、[図5]はいずれも類似したイメージ図となっており、両者は一見ほとんど区別がないかのようにも思われる。しかし実際には、それぞれの量詞から受け取られるイメージは異なり、“片”は[図4]に点線で示したようにその色の広がり、すなわちその色が存在している範囲を表し、“丝”は、ほんのりと浮かび上がるような色彩に焦点があり、範囲の広がり意識されていない。そのため、“片”の描写の焦点は「一定範囲の広がり」とまとめることができるのに対し、“丝”で表される描写対象は、“片”と同様に一定範囲の広がりを持つ色であっても、強調されているのはその色のかすかさ、すなわち程度であり、その描写の焦点は「かすかさ」と表すことができるのである。

以上、各量詞の描写の焦点を確認したが、ここで重要なのは、それぞれの描写対象となる「部分」がいずれも明確な輪郭をもたない、或いは意識されていないという点である。そこで、次の用例を見てみよう。

- (10) 在飞行表演中，飞机有时会拉出一条彩色烟带，有时是红色的，有时是蓝色或黄色的，……。

(演技飛行中、飛行機はある時はひとすじの色の付いた煙を出し、それはある時は赤色、ある時は青色、或いは黄色をしており、……。)

- (11) 在脸颊上圆圆地涂上粉红色可以变得很可爱。

(頬にまん丸くピンク色を塗ると、とてもかわいらしくなる。)

用例 (10) は空に映えるカラフルな煙幕、用例 (11) は頬にまん丸く塗られた化粧品が描写対象であり、それらはいずれも背景から際立っていることが前提となっている。このように描写対象が明確な輪郭を持つ場合、用例 (10) の“一条彩色烟带”のように、「細長いもの」という形状が明確にイメージされる量詞“条”が選択され「数詞+量詞+名詞」の形式が用いられたり、用例 (11) に点線で示したように、数量構造ではない別の表現形式が選ばれる傾向が強くなる。これは、描写対象と背景との境界線が強く意識されることで、その対象が一個体として認識されてしまうためであり、「数詞+量詞+形容詞」では落ち着きが悪くなるのである。

では、次のような場合はどうであろうか。

(12) 她的脚顺便朝桌上一放，茶壶踢得滚下来了。小莺立刻翻起来，面孔是土色。……整个的土色添了颊上一块红，两个指头掐的。

(彼女が足をなにげなくふと机の上になげだすと、その勢いで急須が転がり落ちてきた。小鶯はすぐに飛び上がり、顔は土気色をしていた。……顔一面の土気色に、頬の一片の赤色が添えられ、それは二本の指でつねった迹だった。)

用例 (12) は量詞“块”と形容詞との共起例である。“块”は“一块面包”のように、聞き手にその形状を比較的はっきりとイメージさせうる量詞であり、これまでの分析結果に照らせば、この時点ですでに成立条件を満たしていないことになるだろう。しかし、これはネイティブチェックでも定着度が高いことが確認できており、該当する量詞はほぼ“块”に限られることから、これはある平面上の部分的な色を強調する場合に用いられるやや特殊なケースと思われる。

また、同様に描写対象の輪郭がはっきりとしているケースとしては、次例 (13) の“一抹乌黑”が確認できた。

(13) 龙行风冷靜的微笑，抹去她眼下的一抹乌黑，“你的脸脏了。”

(龍行風は冷静にほほえみ、彼女の目の下にあるひとすじの黒色をぬぐい去った。「君の顔が汚れているよ。」)

肌の上に黒い汚れがついていれば、用例 (11) でみた化粧品と同様に、その色は際立ったものであるといえるだろう。しかしここでポイントとな

るのは、量詞“抹”が筆で線を引くような動作を痕跡として強く意識している点である。すなわち、確かにその痕跡は帯状の広がり呈しているが、あくまでもその動作の結果としてある色が平面上の一部分に広がっていることを描写しているのであり、やはり境界線は意識されていないのである。

2.2. 空間的広がり

以上、平面的広がりについてその共起関係を観察したが、次に空間的広がりを描写する場合について考えてみる。そこでまず、用例を見ていただきたい。

(14) “我知道了，医院里到处是一团白，又单调又无聊，……。”

(「俺はわかったよ、病院の中は至る所一面が白で、単調でつまらない、……。」)

(15) 晚上十一点多钟看到有两个到大坨沙的人下了车，也跟着下了。下了车四周一团漆黑，并没有车站，近处连房子也没有，……。

(夜11時過ぎに大坨沙に向かう2人の人が車から降りるのを見て、一緒に降りた。車を降りると辺り一面真っ暗で、停留所もなく、近くには家さえもない、……。)

(16) 那天晚上汤潘回家挺晚。打开门，客厅里一团漆黑。

(その夜湯潘は家に帰るのがとても遅かった。ドアを開けると、客間中真っ暗であった。)

これらはいずれも、建物中が真っ白である、辺り一面または部屋中が真っ暗である、といった、ある空間全体を占める色彩の描写であり、平面的広がりを描写対象とする場合と同様に、その空間は境界線が意識されない果てしない広がりとして認識されている。用例(14)、(16)は部屋中の描写であり、実際には区切られた空間であるが、例えば用例(16)での発話者は視界のきかない暗闇の中におり、まるで闇夜の中にいるかのようなイメージがなされていると考えられ、認識としては用例(15)と共通していると考えべきである。

また、その空間は「果てしない広がり」という条件を持つことから、さらに発話者がその空間の中に存在している、或いは存在可能であることが必要条件となる。そのため、その空間の占める範囲が狭まればその許容度

は下がり、[図6]の小箱のように人間がその中に存在できないほどの狭い空間の描写にはこの共起関係は許容されにくい。

さらにここで興味深いのは、“一[屋子]人”のように、名詞を伴う場合には頻繁に用いられる借用量詞と共起した「数詞+借用量詞+形容詞」の許容度が低い、という点である。そこで、用例(17)、(18)を比較していただきたい。

(17) 后来他关掉了灯，屋子里一[片]漆黑，……。

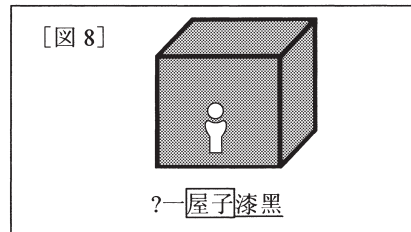
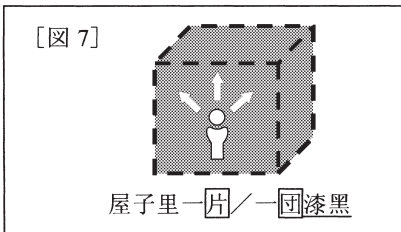
(その後彼が明かりを消すと、部屋の中は真っ暗になり、……。)

(18) 推开门的一瞬间，看到的却是一[屋子]漆黑。

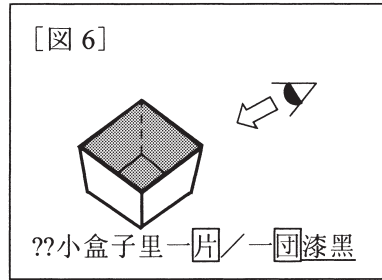
(扉を開けた瞬間、目に入ったのは部屋全体に広がる真っ暗闇であった。)

これらはいずれも室内が真っ暗な様子を描写しているのだが、ネイティブチェックの結果では、用例(18)のように借用量詞“屋子”を用いた場合、用例(17)の“片”、或いは“团”を用いた場合より許容度が下がるという回答が多く得られている。

そこで、それぞれの認識方法をイメージ化すると [図7]、[図8] のようになる。



[図7] は借用量詞を用いない場合のイメージであるが、描写対象となる空間を点線で示したことからわかるように、描写の着眼点はその対象となる空間そのものであり、その周囲を取り巻く空間との境界線（ここで



は部屋の壁や天井) が全く、或いはほとんど意識されていない。逆に、[図8] “一[屋子]漆黑” のように借用量詞が用いられた場合には、まず喚起されるのは外界と明確に区切られた「部屋」という空間であり、「果てしない広がりを持つ空間」という条件が満たされない。そのため、借用量詞と形容詞との許容度は低くなると考えられ、これは、2.1 で述べたように、平面的広がりについて「背景との境界線が意識されるかされないか」がポイントとなっていたこととも共通する点である。

[一[屋子] 绿幽幽的月色 / 白茫茫的光 / 黑暗
一[屋子]* 绿幽幽 / * 白茫茫 / ? 漆黑⁶⁾

2.3. 個体の表面全体を覆う色

2.2 では空間的広がりについて触れたが、ここでは描写対象は同じく三次元的広がりを持っているが、描写の焦点がその空間ではなくある個体の表面にある場合について考えてみる。

(19) 这有什么好害羞的，她居然一[脸]通红。

(何が恥ずかしいというのか、彼女は意外にも顔一面が真っ赤になった。)

(20) 喜庆的日子，二姐自然是穿了一[身]红，红棉袄，红棉裤，……。

(おめでたい日に、二番目の姉は当然のように全身赤いものを身につけ、赤い綿入れや、赤い綿入りズボン、……。)

用例 (19)、(20) では量詞“脸”、“身” が用いられているが、この共起関係は身体部位を借用量詞とし、且つ皮膚のようにその部位全体を覆っている場合に限られる。しかし、たとえ身体部位であっても、鼻・耳・てのひらなど表面積の狭いものは単体ではなく顔や身体の一部として認識されるため、“* 一[鼻子] / 巴掌红”などは許容されないようである。

ただし、単体と見なしうる描写対象の表面がいくら同じ色で覆われていたとしても、ひげや髪の毛など、何かの集合体によってその表面全体が埋め尽くされてその色を呈している場合、次例 (21)、(22) のように、量詞の後にはその描写対象が現れてくる。これは、描写の焦点が表面全体から表面全体を埋め尽くしているものへと移行し、その形態が意識されてしまうためであろう。

(21) “他有胡子没有？”春儿还是问。“一[脸]黑胡子碴儿。”芒种说。

（「彼はひげを生やしていましたか？」春児はやはり尋ねた。「顔一面黒いひげでした。」芒種は言った。）

- (22) 商正顺着他指的方向看去，只见那人有着一团乌黑的短发，……。
（商正は彼の指す方向を見やると、ただその人の頭一面が黒い短髪であることを見てとれた。）

集合体が呈する表面色の描写について言えば、借用量詞以外にも次例(23)、(24)のように“团”を量詞とした「数詞＋量詞＋形容詞」を確認することができる⁷⁾。

- (23) 远远望去，岛上郁郁葱葱，一团绿、一团红、一团黄、一团紫，端的是野花似锦。

（遙か遠くを見やると、島は草木が青々と茂っており、一群の緑、一群の赤、一群の黄色、一群の紫と、確かに草花が錦のようである。）

- (24) 母亲将苞谷放到锅里猛火爆炒，……把锅盖揭开，只见朵朵“小棉花”堆在锅里，一团雪白。

（母親はトウモロコシを鍋に入れて強火で炒め、……鍋のふたを開けると、一つ一つの「小さな綿花」が鍋の中に積まれており、一群の白色をなしていた。）

ただし、これらはいくまでも集合体の描写に限られる。そのため、例えば「トーストがまる焦げになった」状態を“*面包烤成一团黑”とは描写できず、“面包”のような独立した単体の表面を描写するには、やはり「数詞＋量詞＋形容詞」構造を用いることはできないのである。

2.4. 線的広がり

以上、平面的広がりと空間的広がり、すなわち、二次元的広がりと三次元的広がりを持つ描写対象について、量詞と形容詞の共起傾向を確認してきたが、両者に共通する特徴は、いずれも一定範囲の広がりを持ち、且つ背景もしくは周囲との境界線が意識されていない、という点であった。では、平面や空間のような広がりを持たない線的広がり、すなわち一次的広がりについては、この構造は許容されないのであろうか。そこで次の例を見てみよう。

- (25) 那圣剑剑身墨黑，锋面一线白。

(その聖剣の刀身は墨のように真っ黒で、峰はひとすじの白色をしていた。)

用例 (25) で量詞“线”が用いられていることからわかるように、ある平面上の一次元的広がりを描写する“线”も形容詞との共起関係が確認できた。“线”の描写対象はそもそも背景から切り取られるだけの一定面積を持たず、背景との境界線が認識できないため、背景と描写対象との色彩コントラストの強弱による影響も多分に受けていると考えられる。しかし、やはり境界線が意識外にある点では共通しており、同様に細長いものを描写していても、それが明確な幅をもち“线”ではなく用例 (25)' のように“条”で描写されるようになると「数詞+量詞+形容詞」構造は許容されなくなることから、境界線の認知が重要なポイントとなっていることが証明できる⁸⁾。

(25)' *锋面—条白

3. 視覚以外の感覚的描写

2章では、視覚描写において確認できる「数詞+量詞+形容詞」構造について考察を加えた。実際、量詞と形容詞の共起が見られるのは、五感表現においてはほとんどが視覚描写であるが、他の感覚、すなわち聴覚、味覚/嗅覚⁹⁾、触覚についても、かなり制限が見られるものの「数詞+量詞+形容詞」の使用例が確認できる。そこでここでは、視覚描写について確認できた共起関係と比較しながら、それぞれの描写対象について簡単にその傾向を確認することとする。

3.1. 聴覚

聴覚描写において「数詞+量詞+形容詞」構造が確認できた量詞は“片”のみであった。視覚描写において“片”が果てしない平面的、或いは空間的広がりを描写する際に用いられることはすでに確認したが、ここではまず、聴覚と視覚の類似性を簡単に確認しておく。

聴覚描写では、“很大的笑声”、“他的声音很粗”の“大”、“粗”のように空間的広がりが喚起されるものが多く、さらに“响亮的歌声”、“回答得很洪亮”の“响亮”、“洪亮”で明るさを描写する“亮”が用いられるなど、視覚的イメージを用いた表現が多く用いられる。これらの点は、井出

2001a、2001bで共感覚現象について考察した際にも確認できた傾向であるが、このような類似性から、聴覚描写では視覚的イメージを喚起させる場合、すなわち視覚描写と同様の認識過程を経ていると想定できる場合には、「数詞+量詞+形容詞」構造が許容されると考えられる。

(26) 我和毛雅秀交谈的时候，男教师宿舍里一阵吵闹。

(私と毛雅秀が語り合っている時、男性教師が宿舎で騒いでいた。)

(27) 船篷上刹喇喇一阵响亮，大雨洒将下来，跟着一阵狂风刮到，……。

(マストの上ではバラバラと一面に鳴り渡り、大雨が降ってきて、続けて一陣の強風が吹き、……。)

しかし、同様に空間的イメージが喚起されても、“歌声很小”、“她的声音很细”の“小”、“细”のように広がりとは反対ベクトルである範囲の狭さ、或いはかすかさのイメージを伴う聴覚描写には名詞成分が必要となる。例えば、聴覚描写において名詞との共起が確認できる量詞“丝”は、形容詞との共起関係は確認できない。“丝”は視覚描写では平面の部分を描写する際に形容詞との共起が確認できたのだが、これに対し音声は色のようにある一部分だけを切り取って捉えることは難しい。このため、量詞と形容詞の共起が許容されるのは、視覚的イメージを喚起させる聴覚描写の中でも、さらに視界全体への広がりをイメージさせる場合のみに限られると考えられる。

[一丝吵闹声 / 响亮的掌声 / 洪亮的笑声
*一丝吵闹 / 响亮 / 洪亮]

3.2. 味覚／嗅覚・触覚

まず次の例を見ていただきたい。(28)、(29)は味覚／嗅覚、(30)は触覚の例である。

(28) 宋嫂鱼羹酸溜溜的，带一丝微辣，很开胃。

(宋嫂魚の羹は酸っぱくて、かすかにピリッとして、とても食欲が出る。)

(29) 圆圆的罗汉果和枸杞子冲泡在一起，飘出一丝甜蜜。

(丸々としたラカンカとクコの実を一緒に浸すと、かすかに甘い香りが漂ってくる。)

(30) 高原的冬天太阳走得很快，……噶尔丹反而不再着急，裹得紧的翻毛棉大衣使他身上觉不出一丝冷来，……。

(高原の冬は大陽が沈むのがとても早く、……噶尔丹はしかしもう焦ることはなく、起毛のオーバーでしっかりと身体を包み込むと、ほんのわずかな寒さも感じられず、……。)

以上の例からもわかるように、味覚／嗅覚、触覚描写では視覚描写と同様に、程度がかすかであることを強調する場合には量詞“丝”との共起が確認できた。逆に、名詞とはしばしば共起する“股”、“抹”、“团”であるが、これらは「かすかさ」を強調する働きを持たないため、「数詞＋量詞＋形容詞」構造は許容されない。

【味覚／嗅覚】	〔	一 <u>股</u> 辛辣的味道／ <u>臭味</u>	〔	一 <u>抹</u> 甜蜜的香味／ <u>臭腥</u> 的肉味
		*一 <u>股</u> 辛辣／ <u>臭</u>		*一 <u>抹</u> 甜蜜／ <u>臭腥</u>
【触覚】	〔	一 <u>股</u> 凉风／ <u>暖和</u> 的西风	〔	一 <u>团</u> 冰冷的空气／ <u>热气</u>
		*一 <u>股</u> 凉／ <u>暖和</u>		*一 <u>团</u> 冰冷／ <u>热</u>

また、例えば、ある空間全体に熱・味・においが充満していたとしても、聴覚描写のように量詞“片”を用いた「数詞＋量詞＋形容詞」の表現形式は用いられない。これは、味覚／嗅覚、触覚は聴覚のように視覚的の広がりイメージを喚起させないためであると考えられる。

以上のように、視覚的イメージの有無によって、共起する量詞が明確に区別される結果となったが、この要因の一つとしては、味覚／嗅覚、触覚が直接感覚、視覚、聴覚が間接感覚であるという性質の違いも指摘することができる¹⁰⁾。

4. まとめ

以上、視覚描写を中心に、中国語五感表現における「数詞＋量詞＋形容詞」構造について観察してきた。そこで、各描写対象ごとに、その描写の焦点と共起関係が見られた量詞について次項〔表4〕にまとめておく。

この表からもわかるように、「数詞＋量詞＋形容詞」構造の描写の焦点は「広がり」と「かすかさ」に大きく分かれ、「広がり」を代表する量詞は“片”、“かすかさ”を代表する量詞は“丝”である。また、量詞については、身体の表面を覆い尽くす場合を除けば、借用量詞は許容されないこ

とが見てとれるだろう。言い換えれば、この構造が許容される描写対象は、背景との境界線が明確に認識できない、もしくは意識されない平面、或いは空間的広がりであり、描写対象の形態的イメージをはっきりと喚起させうる個体量詞や、容器となるものからの借用量詞は許容されにくい、ということが確認できた。

しかし、最初にも触れたように、今回の検討では“一[片]辉煌”や“一[絲]不安”のように、より抽象度の高い描写対象の検討には及んでいない。さらに、「量詞＋形容詞」と共起する数詞がほぼ“一”に限定されていることについては、“満[屋子]人”の“満”との関係もあわせて検討する必要がある問題であり、今後はこれらも含めたより全般的な傾向の把握が課題となる。

[表 4]

	描写対象		描写の焦点	共起可能な量詞	
				個体量詞	借用量詞
視覚(色彩)	平面	視界全体	広がり	片	/
		平面の一部分		抹、片、块	
		かすかさ	丝		
	空間全体		片、团	* 屋子	
	個体の表面全体	広がり	团[集合体]	脸、身、* 鼻子[单体]	
線			线	/	
聴覚	一面に広がる音声		広がり	片	* 屋子
触覚(温感)	かすかな温度		かすかさ	丝	* 脸、* 身、* 屋子
味覚/嗅覚	かすかな味・におい				* 口、* 碗、* 身、* 屋子

<注>

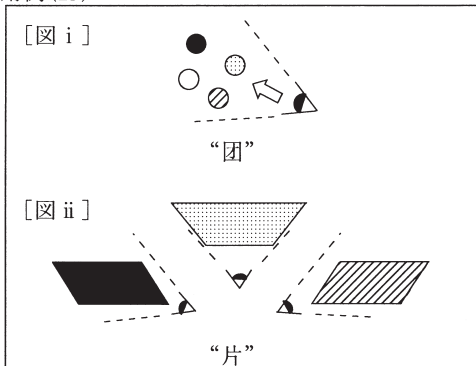
- 1) 協力してくれたネイティブスピーカーは、20代から30代にかけての中国東北地方出身の女性数名で、大学院在籍もしくは修了者である。ネイティブチェックを進めるにあたっては、各人の語感に基づいてその許容度を判定してもらい、許容度が高いとの判定が半数以上得られたものを中心に検討を進め、用例が見つかっていてもネイティブチェックで全員が許容されないと判定したものについては採用しなかった。

- 2) 刘 1999 の分析では“时间量词”と共起する形容词に“脸色形容词”が挙げられていたが、まとめ部分では欠落していたので、[表 2] 中で筆者が補足した。“其他量词”と共起する形容词については刘 1999 でも詳細な検討がなされていないので、表中には示されていない。また、アンダーラインは筆者によるものである。
- 3) ただし、抽象物を対象物とする場合には、不定量を表す数詞との共起も確認することができ、刘 1999 の“其他量词”の用例中にも“几分割悻”という例が見られる。
- 4) 名詞と量詞の共起における量詞選択の規則性については、杨达 1995 が視覚的認知に着目した検証を行っている。また、石毓智 2001 でも量詞の認知システムについて次元という視点から論じており、各量詞の特徴が詳細に論じられている。
- 5) “片”と同様に平面的広がりを表す量詞として“派”（“一团／派好风光”）が挙げられるが、『现代汉语量词用法词典』に以下のような記述が見られるように、描写対象のほとんどが抽象物であるため、本稿での検討対象とはしなかった。ただし、『现代汉语量词用法词典』では、名詞との共起において確認できる両者の振る舞いの違いについても指摘しており、“片”と“派”との比較は、今後抽象的な描写対象を含めた検討を行う際の一つの課題である。

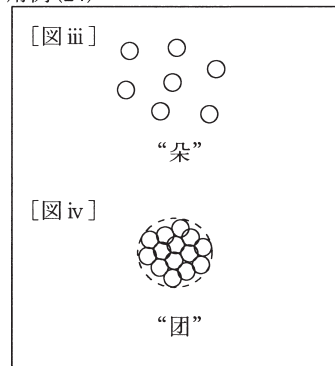
“派”与“片”都可与“一”构成数量词“一派”与“一片”，修饰景色、气象、声音、语言等。……“片”修饰景色、气象时，重在视觉，不重气势；“派”则重在内心的感受。（『现代汉语量词用法词典』107-108 頁）

- 6) 色彩形容词の中でも、“漆黑”は暗闇を描写する表現としてかなり定着しており、借用量詞“屋子”を用いた場合もその許容量が高くなっている。これは「黒」という色が人の視界を遮るものであり、境界線を認識させにくいことも関係があると思われる、実際、空間描写において量詞と共起する色彩形容詞には透明度の低いものが多い。逆に、たとえ空間がある色で埋め尽くされていたとしても、本文中の例にも挙げ

用例(23)



用例(24)



のように、その透明度が高い場合にはこの共起関係はほぼ許容されない。

- 7) さらに用例 (23) については、量詞を“片”に置き換えるとその描写対象は視界の所々にかたまって咲いているさまざまな色の草花 ([図 i]) から、視界全体に広がる同じ色の草花の広がりが多方面に存在している景色 ([図 ii]) へと描写の焦点が移行する。また、用例 (24) では、一つ一つの“小棉花”は“朵”で数えられている ([図 iii]) のに対し、それが固まって一つになれば“团”を用いて表現されている ([図 iv]) 点など、それぞれの量詞の捉え方の違いがよく現れているおもしろい例である。
- 8) 零次元である「点」についてもわずかならうが用例が確認できたが、「点」も「線」と同様に背景から切り取られる境界線を持たず、色彩コントラストの強弱による影響が大きいと思われる。
- (i) 到春时, 番薯的颈部猛丁生出新芽, 是一些紫红的嫩芽, 顶尖衔着一团绿, ……。
(春になると、サツマイモの首の部分に突然新芽が出てきて、これは紫がかった深紅の数枚の若芽で、先端は一点の緑があり、……。)
- ただし、ミクロ的視点でみれば、これらも一定量の広がりを持つと捉えることも可能である。石 2001 では“条”を二次元量詞であると指摘しているなど、この点についてはさらに検討が必要である。
- 9) 味覚と嗅覚は同時に認識されることが多いため、ここではまとめて取り扱う。
- 10) 井出 2001a は、その修飾関係に直接感覚・間接感覚の影響があることを確認している。

<補注>

脱稿後、刘 2004 『现代汉语比较范畴的语义认知基础』の巻末の付に「“数+量+形”结构的语义认知基础」(275-317 頁) があるとのこと指摘を頂いた。刘 2004 では、刘 1999 での検討内容に加え、統語関係など新たな視点から考察が行われており、今後の検討において大いに参考となるものである。第三節「量词与形容词的相互选择」が刘 1999 に該当し、両者では用語の違いなども確認できるが、本稿では刘 1999 に基づき検討を進めている。

<参考文献>

- 井出克子 2001a. 「中国語五感表現に見られる共感覚に基づく比喩について」, 『中国語学』 248: 213-227 頁。
- 井出克子 2001b. 「五感における程度表現—形容詞の一側面—」, 『中国学志』 豫号 (第 16 号): 1-18 頁。

郭先珍 2002. 『现代汉语量词用法词典』。北京: 语文出版社。

刘 焱 1999. 「量词与形容词的搭配问题探讨」, 『汉语学习』 1999 年第 5 期: 60-63 頁。

- 刘 焱 2004.『现代汉语比较范畴的语义认知基础』, (上海财经大学国际文化交流学院学术丛书)。上海: 学林出版社。
- 石毓智 2001.「表物体形状的量词的认知基础」,『语言教学与研究』2001年第1期: 34-41 頁。
- 邢福义 1965.「谈“数量结构+形容词”」,『中国语文』1965年第1期: 34-36 頁。
- 杨 达 1995.「量詞の形態的な意味特徴について—視知覚機能による認知と関連して—」,『中国語学』242: 46-55 頁。